第十回「『教行信証』に学ぶ会」　令和三年六月十日

講師　延塚知道先生

はじめに

どうも皆さんこんにちは、昨日からだいぶ暑くなりましたね。体に気を付けてください。私はワクチンを一回打ちまして、今度は十五日に二回目を打ちます。皆さんは打ちましたか、添田町は進歩していますね。早く打っていただいて大変ありがたく思っています。打ち終わってすぐに北海道に二週間ほどお話に参ります。みなさん「もうコロナで止めるのは嫌だ」と言い出して、「もうやる」とおっしゃるものですから、北海道でお話をして少し元気になって帰って来ようと思っています。

今、皆さんと一緒に『教行信証』の行の巻を拝読しています。田畑先生が五年計画だとおっしゃるとプレッシャーでつぶれそうです。そんなにはなかなか進まないのです。『『教行信証』』はやはり難しいですから、ひとところを申し上げるについても、何とか分かっていただきたいと思う気持ちがありまして、進まないものですから、私も少しイライラしていますけれども。まあ五年したらどっちか死ぬでしょう。もし終わらなかったら、また続けてお話させていただいて、今度は罰として私の方がお布施を払うということでお話させていただければいいかなと思っています。ともかく今は行の巻の一番最初の大行釈と言うところです。

大行　仏のはたらき

それで、この間もお話をしましたように「行」と言うと、皆さんすぐに「修行」というふうに考えますね。人間の方が一生懸命努力してがんばるというのが人間の癖です。ですから仏様の悟りを頂くためには、私たちは少しは努力しなければいけない。だから普通は修行をする。あるいは修行をするというところまではいかなくても、仏法にのっとって生活をするとか、あるいは生活の中で悪いことをせずにつつましく生きていくとか、いろんなふうに人間の方に条件を付けるのが「行」というものの考え方です。

ところが、どうも何か条件を付けられるとはね除けられる人が出て来る。顔を見ると皆さん真面目そうですが、私なんかはろくな奴ではありませんから、「まじめであれ」と言われるとしんどくなってくる。「いいことをせよ」と言われると、がんばってやっているつもりでも、その時はいいことだと思って一生懸命がんばったのですが、あとからあんなことしなければよかったということばかりになってくる。そうなると人間の方に一つでも条件を付けると他力の仏教にはならない。

完全に仏様の方から、どんな人でも救うということが保証されない限り、群萌を救うという大経の行にはならないということがあるわけです。簡単に言えば、親鸞聖人の「行」の了解はこれまでの大乗仏教の「行」というものを完全にひっくり返す。例えば法然上人でも「往生浄土の行」と言うでしょう。そうすると、どうしてもやはり、念仏を称えて浄土に往生していく、悟りの方に向かうという意味が強くなるわけです。ですから、親鸞聖人はそれもやめて、「大行」というのは如来の方が完全に人間を救うはたらきなのだ、というふうに方向を全く変えてしまった。

「人間から悟りに」というのではなくて、「悟りの方から人間に」というふうに方向を変えると同時に、行の概念も変えてしまって、仏

様が完全にこのままで救ってくださらなかったら漏れる人が出てくる。だから誰も漏らさないためには、仏様の方が完全に救ってくださるのだと言うふうに行の概念を変えたために、普通の「行」という言い方では間違えられるから、わざわざ難しい「大行」というふうに呼ぶ。これは簡単に言えば、「大」と言うのは仏さんのはたらきという意味ですから、「如来回向の行」、如来の方がこっちに来てくださる行、こういう意味で「大行」と言う聞きなれない言葉に変えてしまったのです。

その内容はなかなか難しい、この間も西藤さんの所でもお話をさせていただいたのですが、仏様がこのまんまの人間をこのまんまで丸ごと救うというは、仏様のはたらきなのだけれども、その時に絶対にいるのは「仏様の悟り」です。仏教ですからあたりまえです。

「帰命尽十方無碍光如来」あるいは「大涅槃」、あるいは「功徳の大宝海」、言葉はいろいろ違うけれども仏様の悟りの世界にこのままで私たちは解放されていく、そのためにお念仏が要る。そのお念仏のはたらきを、大行釈のところで、少し難しい言葉で、親鸞聖人がおっしゃっておられますので、もう一度皆さんと一緒に拝読をしてみましょう。行の巻は言ってしまえば「大行とは何か」ということを了解していただけばそれでいいのです。だから、しつこく言っているわけです。皆さんと一緒にちょっと読んでみましょう、行の巻の一番最初、私の聖典だと百五十七ページになります。

大行釈

「謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、すなわちこれもろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功徳宝海なり。かるがゆえに大行と名づく。しかるにこの行は、大悲の願より出でたり。すなわちこれ諸仏称揚の願と名づけ、また諸仏称名の願と名づく、また諸仏咨嗟の願と名づく。また往相回向の願と名づくべし、また選択称名の願と名づくべきなり」

ここまでです。やはり文章は難しいでしょう。

「大行というのは、すなわち無碍光如来のみ名を称するなり」

この文章は、勉強している人は分かっているかもしれないが、曇鸞の『浄土論註』の讃嘆門釈の文章をそのまま引用しています。ですから、難しいことを言っているように聞こえるかもしれませんが、基本的に南無阿弥陀仏と頭を下げるということは、これは仏様を讃嘆するということ、讃嘆門釈ですから、南無阿弥陀仏と称える時には、仏さんの大きなはたらきの中に生かされているということを思って、仏様を誉める、讃える、讃嘆するということから出て来るわけです。そして

「この行は、すなわちこれ諸々の善法を摂し、諸々の徳本を具せり。」

この大行という行は、仏様の素晴らしいはたらき、善法を全部摂めて、しかも仏様の最後の悟り、徳本という悟り。「善法」というのは法蔵菩薩のはたらきです。法蔵菩薩のご苦労です。その法蔵菩薩のご苦労を全部摂めとり、そして帰命尽十方無碍光如来という仏様の大きな悟りまでちゃんと摂め取っていてくださるのです。

だから「帰命尽十方無碍光如来」とみ名を称えれば、この凡夫のままで

「極速円満す」

すぐに仏様の悟りの中に包まれて、「このままで十分だ」と言えるようなものにさせて下さるのです。

「真如一実の功徳宝海なり」、

他力の「帰命尽十方無碍光如来」という仏様の悟りは、大きな海のように私たちを包んでくださる。

功徳大宝海

これまで何度も私が申し上げましたが、親鸞聖人の仏教でも、仏教ですから「仏様の悟り」を頂くのです。「愚か」だとか、「凡夫だ」とか、「悪人だ」とかばかり言っているから暗くなるけれども、そのまんまで仏様の世界の中にあったのだということに目覚めていく。聖道門であったら、おそらくこれを「悟りを覚る」というのでしょう。しかし浄土教は、凡夫のままで修行もしないのに仏様の世界の中に解放されていくから、「私が覚って私のものにした」と言うのではなくて、「海のような大きな一如のはたらきの中に、分別を超えたはたらきの中に摂め取ってくださるのだ」、こういう素晴らしい言葉で仏様の世界をほめているわけです。

皆さん方は「難しい言葉で言っているなあ」と思うかもしれないけれども、この「功徳大宝海」というのは世親（天親）菩薩の『浄土論』の偈、それも一番大切な「不虚作住持功徳」の偈の中に出てくる言葉です。

「観仏本願力　遇無空過者　能令速満足　功徳大宝海」

「能令速満足、功徳大宝海」海のような悟りに、私たち凡夫のままで解放されていく。

「功徳大宝海」、あの世親菩薩のような菩薩でも「自分が覚った」とは言っていない。「大きな海のような悟りの中に解放された、それがうれしい」と歌っているのです。よくぞ「不虚作住持功徳」の偈を世親菩薩が歌ってくださったと思います。世親菩薩は七祖の中で初めて他力の悟りを、「功徳大宝海」という言葉で偈にしてくださった。

親鸞聖人の『教行信証』には何度もこの世親菩薩の偈がくり返されます。そこに、どれだけ大切な偈か、言葉か、うかがわれるのです。親鸞聖人は、この行の巻の大切な「大行」という言葉を言う時に、曇鸞の『論註』と世親の『浄土論』に依って注釈しています。その後もそうです。『論註』によって注釈をしていきます。「不虚作住持功徳」の偈、これは「大経の悟り」を歌う偈です。

獲得名号

それで、なぜ「凡夫のままで救われる」という事が起こるのか、そんな馬鹿なことがあるか。不思議なことはない。だから、なんでそんなことをするかよく分からないけれども、親鸞聖人は仏様の方のはたらきを、「因のはたらき」と「果のはたらき」に分けて、それをしつっこく、くどく何度も言います。

因と果に分けるというのは何度も出て来るのですが、一番分かりやすいところを一か所だけ見ておきましょう。私の聖典ですと五百十ページになります。『正像末和讃』に挟まれて「自然法爾章」という文章があります。そこに「獲得名号」という字の解説をしているのです。

「獲の字は因位のときうるを獲という。得の字は果位のときにいたりてうることを得というなり。名の字は因位のときのなを名という。号の字は果位のときのなを号という」

「名号を獲得する」というのはわかりますね。この間、西藤さんが、「自分は大行と了解して念仏している。だけど大行大信というふうに、そんなに信ということを言わないといけないのか」と言っていましたが、言わないといけません。「大行と思って」と言っているが、本人が思っているだけです。「信心」ということによって「獲得名号」、名号を獲得するのです。「凡夫のままで救われた」ということを「獲得」と考えてもいい。

身が感得している実感

『教行信証』とか親鸞聖人の書いているものを理解して分かろうとする。難しいね。それは大事なことなのですが、だけどそうではなくて、親鸞聖人が言うのは「身の方の感得」です。身が分かった方を「分かった」というのです。頭で分かったのを「分かった」とは言わないのです。

「身が分かる」、うまいこと言えないが、例えば、冬になるとストーブを焚くでしょう。うちの娘のもそうでしたが、小さい子供が手を出す。「熱いから、さわったらいけないよ」という。子どもは「わかった」というけれども手を出す。で、「熱い」と言ってぱっと手を引く。これを何度かやるうちに身が分かってくる。すると、「お前さわってみ」と言うと「バカ」と言って触らなくなります。この「頭ではなく身が分かる」、それを親鸞聖人はお書きになっていると考えてください。なかなか難しいけどね、

皆さん眠たそう顔をしているから。こんなことを言うけど、昔、あるところで話していたら、後の方で酒を飲んだじいさんが赤い顔をしてニコニコしてじっと聞いているのです。そして終わったら、「先生、一杯飲もう」と言うのです。僕もまだ若かった。そのじいさん面白い人だった。その人、坊さんではないのです、普通の人です。正直なじいさんで、飲みだすとそのうちその人が話し出して

「先生、おれ、酒を飲んで言うけれども、皆さん酒を飲んでいないから聞きにくいかもしれないが、我慢して聞いてください、おれは若い頃、悪いことばかりしたのです。女が好きでな、たいがいわしは苦労してきた。手を出したらあかんということはわかっている。でもこれ（足）があかん、これが行くのです。」

「あんたが言う通りや。親鸞聖人がいうとおりや。だから俺、親鸞聖人が好きなのや」と言って酒を飲むのです。

このじいさん、大事なことを言っているのです。言っていることは分かるでしょう。

「救い」というのはこの身が先に救われなかったら救いにならない、「頭で分かった」とか、「理解した」とか、そういうものは救いにならないのです。親鸞聖人はこの身が救われていく教えを説いているのです。

そういう身が感得している実感、それを大信。大行・大信、親鸞聖人はこの大信のところで感得していることを述べているのであって、それをまた私たちは頭で考えようとするからわからなくなるのです。だけど、それしかないのですから考えないと仕方がありません。何時かその考え方が破れる時が来る。必ず来るから心配しないで勉強しなさい。

ここで親鸞聖人が言うのは獲得名号、「名号を頂いて今私は救われた」その実感を述べている。

本願が「因」、念仏が「果」

その時に「獲の字は因位のときうるを獲という。得の字は果位のときにいたりてうることを得というなり。」

こんなややこしいことを言うのです。「獲得」にそんな意味があるわけがない。それをわざわざ因と果に分けている、因位のときのみ名を「獲」、「得」は果位の時。

獲得名号の「名」の字は、因位のときのなを「名」という、果位のときのなを「号」という。」こういうふうに名号もまた「因」と「果」にわける。

「因」というのは、法蔵菩薩の五劫思惟のご苦労と、その四十八の本願とです。因というのは四十八の本願を建てるのに苦労なさった、今も苦労しているのです。皆さんの命の深いところで。そしてやがて、さっき私が申しましたように、必ず、分別が破られる時が来る。先生に逢って、偉そうに自分がなんでもわかると思って理解しようとしていたけれども、そんな頭は「屁」みたいなものであって、初めて命の深いところから「南無阿弥陀仏」、「帰命尽十方無碍光如来」というふうに、念仏が湧きおこってくることが必ず来る。その「帰命尽十方無碍光如来」、それが「果」です。

法蔵菩薩の本願が「因」、尽十方無碍光如来のはたらきが「果」、一応解説です。そのことを知っておかないと何のことか分からないから。なんでこんなことを言うのか。ひとつだけはっきりしていることは、「凡夫のままで仏様の悟りに救われる」という事が起こらなければ困るからです。その時に「因」の法蔵菩薩の本願と、「果」の尽十方無碍光如来の悟り、その二つが要るというわけです。

もし皆さんが優れた人で比叡山で修行ができるなら、「果」の尽十方無碍光如来の悟りだけでいいのです。その悟りを覚ればいいのですから。みんなそれで苦労しているのです。私が京都におる時には、あの人、酒井阿闍梨という山の中を走って回る人がいた。ものすごく速いらしいよ、猿より速いらしい。千日回峰行か。あの人達は時々テレビに出たり、新聞に出たりするのです。京都は京都新聞というのがあって、宗教欄というのが一週間に一回でてきます。それに酒井阿闍梨が何度か出たことがあります。走っている時に走りながら仏さんに遇うのだそうです。分からないけれども、人間の力を振り絞って、力で及ばない世界に、そういうものに出会うのだというのです。そのためには猿より速くならなくてはならない。皆さんだったら猪や鹿よりも速いくらいに走れたら、ひょっとしたら分かるかもしれないが。分かるでしょう、それは無理だから。

曇鸞大師の教え

「凡夫のままで、このままで」という時には「本願が要る」というのです。「悟り」だけだったら、こっちから頑張って「悟り」に向かわなくてはならない。そうではなくて「本願が要る」のです。親鸞聖人は「因の『本願』と、果の『尽十方無碍光如来の悟り』、この二つによって凡夫のままで救われるということが実現したのだ」と言っている。

ところがそれも実は、親鸞聖人の前に曇鸞が『浄土論註』で言っているのです。だから曇鸞という人は偉いでしょう。歴史上で初めて、「凡夫のままで救われた」ということを「私が凡夫のまま救われたのは本願が要るのです。悟りだけ示されても無理なのです。本願と悟りが要るのです」というふうに言うわけです。

それがこの文章（「観仏本願力　遇無空過者　能令速満足　功徳大宝海」）です。

もともと「仏の本願力」という言葉ですからスッといきそうですが、曇鸞という人はしつこい人で、これを「仏力」というものと、「本願力」というものと、二つにわけるのです。こんなことをしたのは曇鸞大師が初めてです。

「仏力」の方は仏のはたらきですから帰命尽十方無碍光如来。こちらは「果のはたらき」です。「本願力」の方はもちろん法蔵菩薩のはたらきですから、こちら側は「因力」です。「因です」と言って、訳の分からない注釈をします。この中でひょっとして分かっている人がいたら、その人は分かると思います。皆さんは「難しいこと言うなあ」と思うのでしょう。

ここは仏様のはたらきそのものを表す。親鸞聖人は『『教行信証』』で言うと「真仏土の巻」にそれを引用しています。「真仏土の巻」というのは、またいつか、五年経ったくらいに行くかもしれません。「真仏土」というのですから、これは「如来そのもののはたらき」を表す巻です。親鸞聖人は、如来そのもののはたらきをあらわす時に、この曇鸞大師の「果の尽十方無碍光如来」と「因の本願力」、この注釈を引用するわけです。

三百十六ページ（東聖典）、そこを読んでみます。最初から六行目、

「また云わく、何者か荘厳不虚作住持功徳成就。偈に、「仏の本願力を観ずるに、遇うて空しく過ぐる者なし、よく速やかに功徳の大宝海を満足せしむるがゆえに」と言えり。不虚作住持功徳成就は、蓋しこれ阿弥陀如来の本願力なり。乃至　言うところの不虚作住持は、本法蔵菩薩の四十八願と、今日の阿弥陀如来の自在神力とに依ってなり。願もって力を成ず、力もって願に就く。願、徒然ならず、力、虚設ならず。力・願あい府うて畢竟じて差わず。かるがゆえに成就と曰う」

こういう注釈です。ここに世親（天親）菩薩が、「観仏本願力　遇無空過者」とうたってくださっている、その「不虚作住持功徳」というのは「阿弥陀如来の本願力」のことである。阿弥陀如来の本願力、阿弥陀如来と本願力と分けてね、阿弥陀如来の本願力のことである。

「今日」、いのちの求めているもの

こう言って、そして言うところの不虚作住持は、本法蔵菩薩の四十八願と、皆さんの命の深いところからいつも促し続けているはたらきがあるでしょう。「こんなのでいいのだろうか」とか「もっと勉強をしなくてはいけないのではないか」とか「このままで死ぬのではなくて、なんかもうちょっと晴れ晴れしたい」とか「せっかく生まれてきたのだから、なんか生まれてきてよかったと言いたい」とか、一番根源的なところからの「いのちの促し」、本、これは今始まったことではなくて、兆歳永劫、五劫の昔から、私たちの命の深いところから「法蔵菩薩が促し続けているはたらき」と、そのはたらきが「今」、先生に遇って実現した。

今日、「今日」というと皆さん覚えていますか、「教の巻」にあったでしょう。お釈迦さんと遇った阿難が「今日、世尊　奇特の法に住したまえり、今日　天尊、如来の徳を行じたまえり」というように五徳

瑞現というのがあったね、あの時に全部「今日」というのが付いていた。それです。救われた今、阿弥陀如来の自在神力とに依るのである。それは自分が悟りを覚ったのではなくて、「私たちのいのちの深い促しである願が初めて帰命尽十方無碍光如来を尋ね当てた」と言ったらいいかな。

私たちの命の深いところの促しは何を求めているか分からないのです。この世に見えるものしか私たちは考えられない。だから、まさか仏さんを求めているなんて思いません。生きている間はこの目で見えるもの、好きな人であったり、旦那さんであったり、金や地位であったり、あるいはもうちょっと高尚なことをいうと良心であったり、愛であったり、それを求めているとしか私たちは考えられない。だから苦しみ迷う。

ところが先生に遇った時に「今日、私が求めているものがはっきりわかりました。私は仏になりたいのです」ということがわかる。

地獄のもとは自身にある

「仏になりたい」ということがわからなかったら、人間の上にあるものになっていく。つまり欲、自分の保身、自分を中心に考えていく考え方とか。それがもとになって苦しんでいくわけです。そして、他の動物にはない、考えだした利害とか、考えだした損得とか、考えだした関係によって、人間だけが自殺をし、人を殺します。もちろん他の動物も命を殺すことはあっても、それは自分の命を繋ぐためだけです。人間だけがそうやって人の命を殺していきます。

その分別がおかしいということがわからない。何か起こったら、しょうがないから人間は考える、けどよく考えてごらん、考え通りになったことがいかにないか。私は、昨日ここに来なくてはならないと思って、一生懸命に寝ないで考えていたけど、考えたことを一つも言っていない。そうだったらちゃんと寝た方がいいと分かっているけれども寝られません。それが人間の愚かなところです。

その人間の愚かな分別を破る。『大経』は自分の最も深い願いを満足すると同時に「無明」を破る。「無明」というのは人間が持っている業の深さです。人間に生まれたということの証拠と言ってもいい。本当は仏教を聞くような耳を人間は持っていない。人間そのものがあかんのだ。そんなことを言われたら「どうしたらいいのか」と言いたいだろうが、本当に人間を理解したらそうなる。私たちが自分を守って一生懸命生きてきた。そのことが実は他人を傷つけ、自分も傷つけてきた。いいことをしようと思って頑張ってきたのですが、本当によかったかどうか分からない。これから先どうなるだろうかと思うわね。

そういうところに、「地獄のもとはあんた自身にあるよ」と教えられて、「今日」という時に、初めて「南無阿弥陀仏」と懺悔が起こる。

「さんげ」というのは分かりますか、今は「ざんげ」と読みますが、これはもともとは「さんげ」というサンスクリット語を漢字に直したものです。だから「さんげ」と読むのです。この懺悔と讃嘆、これが「身」で分かった時の感動です。懺悔の方は凡夫の自覚、讃嘆の方は法の感動、悟りの感動。こんなふうに「懺悔と讃嘆ということが本願の成就という時にあるのだ」と言っているのが曇鸞大師です。この注釈なのです。

法蔵菩薩の五劫のご苦労（人間を凡夫に引き戻す）

因の本願によって、本願がなんとかして（凡夫を）そのまま救おうと思って、仏さんの悟りから立ち上がって法蔵菩薩になったのです。

そこまではいいですね。ところが救おうと思ったら、どうにも救いようがない。

「名号を称えよ」と言っても「そんなもの屁のツッパリにもなるか」「金を稼いだ方がましだ」、そんなふうにしか考えない。「仏さんの名前を称えて救われる。そんな馬鹿なことがあるか」「ご院家さん、酒をガバッと飲んでコロリと死んだ方がよっぽどいい」と法事に行くと必ず言うらしい。住職は「それはどうだろうか」と言わなくてはいけないのに、「そうだ」と言って一緒に飲んでいたらしい。けれど、それではあかん。

「救おう」と思っても、「理解しよう」とする。そして救おうと思っても理解しようとする人間は、「理解を超えている」と言っても「理解しよう」とする。「他力、他力」と言っている根性が自力だ、というのと一緒で、何時まで経っても自力が抜けない。仏さんの方はそれを救おう、他力の世界を教えようとしているのに、なんぼ言うても自力から抜け出せないものがおるから、五劫もかかったというのです。「五劫もかかった」というのは、今も仏さんはそれで悩んでいるのです。

よく考えてごらん。仏さんの方ははじめから私たちを「凡夫」と見抜いている。でも皆さんは本気で自分を「凡夫」と思ったことはないでしょう。困った時には「凡夫」と言う。酒を飲んで二日酔いのときに「わしは凡夫だから昨日は飲みすぎた」と言う。弁解の時にはいつも「凡夫だから」と言うが、一度も凡夫になったことがない。その凡夫になったことのない人間を凡夫に引き戻すことに五劫も苦労しているのが仏さんです。

僕が今言うと解説みたいに思うだろうけれども、必ずわかるときがくる。

「南無阿弥陀仏、初めて自分は凡夫になりました」と言って頭を下げたときに、ふと気づくと、「私が気づくよりも先に法蔵菩薩が見抜いて五劫も苦労してくださったのだ、何と有り難いことか」と仏様に頭が下がる。

そこに因の「本願のはたらき」と、智慧の「尽十方無碍光如来のはたらき」とになって、私を凡夫のままで救おうとする。そこには二つの仏様のはたらきが要るのだという訳です。そんな不思議なことがあるかと思うから、その通りの言葉を使っています。

『歎異抄第一章』「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」これは皆さん知っていますね。これは「弥陀の誓願」となっている。でも、よく考えてごらん「法蔵菩薩の誓願に助けられた」と言う方が理屈は通る。ところが唯円という人は偉い人です。「弥陀の誓願に助けられた」と言う。

私一人がため

今言ったように「本願によって凡夫になった」ということを、親鸞聖人がちゃんと言っている個所がある。『歎異抄』だったら分かるでしょう、『歎異抄』の後序六百四十ページ（東聖典）、そこを読みます。

「聖人のつねのおおせには、『弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ』と御述懐そうらいしことを、いままた案ずるに、善導の、『自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ』という金言に、すこしもたがわせおわしまさず。」

はい、そこまで。最初の言葉は、親鸞聖人が「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言いながら、しょっちゅうおっしゃっていたこと。これは、よく考えごらん、弥陀が五劫もの間、苦労して建てた願をよくよく考えてみると、私一人のためであった。

（時間がないから詳しくは言わないが、いいかね）

「南無阿弥陀仏に出会う」とか「本願に遇う」というのは、一人として遇うのだ。だから一人として死ねるようになる。いくら仲のいい夫婦でも「二人で会いましょう」というのは無理です。いくら父ちゃんが出来がいいからと言って、息子が同じというのは無理。必ず一人一人の生活業の中で、先生に遇って、そして「一人」として本願に遇う。

しかし「一人」というけれども、それは私たち「個人」ということではない。「そくばくの業をもちける身に」、ここに「に」と書いてある。世界中の、背負いきれないほど多くの業を持った人達、それを助けたい。

自分でも自分のことがどうにもならないのが私たちです。「自分でも自分をどうにもならないものを何とかして助けたい、とおぼしめしたちける本願がどれほど有難いか」と親鸞聖人はしょっちゅう言っていた。

皆さんどう思いますか。昔のじいちゃんやばあちゃんたちは、この辺になってくると「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言ったのです。みなさんは「へー」みたいな顔をしているけれども、この辺のところになると昔のじいちゃんばあちゃんはよく分かっていた。私が若い頃は「ばあちゃん苦労したね」と言うと、「何のなんの、私の苦労なんて仏さんのご苦労に比べればツッパリにもならない、南無阿弥陀仏」と。昔の北陸のじいちゃんやばあちゃんはみんな言っていました。えらかったよ、みんな、ようわかっている。

今頃、「法蔵菩薩の本願」とか聞いたことがないでしょうが、だいたいこのへんになると眠たい顔になるね。

「弥陀が五劫もかかって苦労しているということは、よほど救われない、五劫の間もかかっても救われない私一人のためだ、それを助けようと思い立った本願がどれだけ有難いことか」と親鸞聖人がいつもおっしゃっておった。そのことをよくよく考えてみると、善導大師の『自身はこれ現に（自分の身は、今日）、罪悪生死の凡夫です。法蔵菩薩がご苦労をした永遠の昔から、凡夫として、常に沈み常に流転して、そして永遠の未来まで救われる縁のない身であります。』という金言に少しも違わない」と唯円は言っています。

そうすると、要するに、「弥陀の五劫思惟の願」というのは、「今、この身は、罪悪生死の凡夫である」ということを教えてくださるのだと、仏様の方が先に見抜いてくださっていたのだと。

それはさっき言ったように、先生に遇って初めて「凡夫」だと教えられた時に、「ああ、私が気づく前に、永遠の昔から仏様の方から凡夫と見抜いてくださっておったのだ」とうなずく。そう言っておられる。ここ、その通りでしょう、僕は脚色していないよ。

『歎異抄』第九章　唯円と親鸞の対話

だから『歎異抄』は、それを言葉にして、唯円と言う人はまた偉い人ですね。『歎異抄』の九章を開けてごらん、これは大事な言葉だから言っておきます。六百二十九ページ、

唯円が「先生、私は念仏をしても、躍り上がるほどの喜びも起こりませんし、浄土に行きたいという心も起こりません。これはどうしたことでしょうか」と聞くのです。偉いでしょう。こんなことを正

直に聞くのです。そうすると親鸞がまた偉いのです。

「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房同じ心にてありけり」

私もあなたといっしょです、少しも喜びも起こらんし、早う浄土に行きたいとも思わない。死にたいとも思わない。だから唯円気にすることはない、私もおんなじだと。しかし、

「よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことをよろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたもうべきなり」

これはなかなか理屈では難しいのですが、僕は親鸞聖人は唯円に「よう問うた」と言っているのだと思うのです。たくさんのお弟子がいる中で、「皆さん質問したら」と言うとふつうは「いやー」と言ってしないでしょう。みんなの前で恥を書いたらいかんとか、恥ずかしい思いをしたらいかんとか思って質問しないでしょう。

「自分は念仏をしても喜べないし、浄土に行きたいとも思わない、どうなっているのでしょうか」と唯円が聞いた。これは恥ずかしいですよ。しかし、そこに親鸞は本願のはたらきを見たのではないだろうか。「あ、こいつに問わしているのは、命からの呼びかけが正直に問わしているのだ」と。

「お前（自分）は、仏法を聞いているとか、親鸞の弟子だというけれど、お前（自分）ちっとも仏法に生きていないではないか」と。そう命の深いところからの促し、唯円はそれを言葉にして正直にそう言った。そうしたら親鸞聖人は「そう、その通り、わたしもそうです」と答られた。身が凡夫だからどうにもならんのです。だから仏さんの方が苦労したのでしょう。だから「凡夫がそのままで救われる」というのが本願のはたらき。「唯円、それでいいのだ」、本願の方に立ち返りなさい。頭で考えるからおかしいことになる、本願の方に立ち返りなさい。そうしたら、このままで救われていく。命の向かう方向は浄土ですからほっておいても浄土に行く。その往生一定に立ちなさい、と。

親鸞は偉いでしょう、こういうところはすごいよ。

仏かねてしろしめして

そこに大事な言葉がある。そこに印をつけておいてください。

「唯円房同じ心にてありけり。よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことをよろこばぬにて」

つまり、「凡夫の身だから、本願に立ち返って、いよいよ往生は一定とおもいなさい」と。よろこぶべき心を抑えて喜ばせないのはこの身の煩悩のしわざだ、と。だからこそ、

この次、印をつけておいて。

「仏かねてしろしめして」

仏は永遠の昔から、五劫も思惟したという大昔から、ちゃんと見抜いておった。

「煩悩具足の凡夫とおおせられたることなれば」

法蔵菩薩の方が、私たちが気づく前から「煩悩具足の凡夫」と見抜いている。だから

「他力の悲願はかくことときのわれらがためなりけり」。

「私」と言わずに「われらがためなりけり」。本願の前ではみんないっしょなのだと。

「仏、かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおおせられたることなれば」、

本願のはたらきは私たちを本当の凡夫に引き戻すはたらきである。

僕が言っているのではない、親鸞聖人がそう言っているのです。

そして、凡夫に返ってみれば、おっしゃる通り、この身が凡夫である。いつまでたっても人間の業が消えない。悩み、苦しみ、人を傷つけていく、それこそが罪なのだ。そういうことを尽十方無碍光如来になって知らせ、私たちの分別を破ってくださる。そこに凡夫のままで仏様の世界に解放されていくという事が起こるのだ、と言っておられる。

僕が勝手なことを言っているわけではないですよ。親鸞聖人がちゃんとそう言っているでしょう。

そのままでいいから生きていけ

『『教行信証』』の一番最初の文章を思い出してください。

「竊におもんみれば難思の弘誓は難度海を渡する大船」

迷って、苦しいこと、辛いことが起こったら、この命の深いところから「そのままでいいから生きていけ、命のまま生きていけ」と言ってくださっている本願に救われて、この渡りがたい世をなんとか生きていくのだ、と。

「無碍の光明は、無明の闇を破する恵日なり」

「無碍の光明」、仏さんの智慧は、仏かねてしろしめして、私を凡夫と見抜いていてくださっていた。そういう仏様にまでなってくださった。だから、私は、今、「南無阿弥陀仏」と言っているのです。

「因」と「果」に分けて、ややこしいことを言うのは、私たちを本当の「凡夫」にさせて（自覚させて）、そして「そのままで実は仏様の悟りの中にあるのだ」ということを教えようとするのです。

仏様の絶対他力のはたらきを大行と言う。だから「本願の名号」と言うように、

「本願」と「智慧」、

「帰命無量寿如来」と「南無不可思議光」、

この二つが南無阿弥陀仏の意味です。

「そうでないと凡夫のままで救われるという事が起こらない」と言っているのが親鸞聖人の仏教です。いいですかね。

まだ言いたいことは多くあるのですが、皆さんも眠たそうな顔をしているし、

ちょっと休憩しましょう

（第二席）

もうしばらく行の巻をお話させていただきます。

難しいですか、親鸞聖人と同じような、ある意味での宗教体験がないと分からないかもしれません。しかし手はあります。私も皆さんと一緒です。

松原祐善先生の思い出

学生の頃、私の先生に怒られ続けた。分別で解説すると怒られました。「そのもとは何や。もとは」と言って怒られた。そして私の先生は話が下手だった。（笑）

同じことばかり言っていた。

「あらゆる衆生、その名号を聞いて信心歓喜せんこと、乃至一念せ

んじゃ」と机をたたく。
ビクッとするでしょう。いや、ほんとにしていました。（笑）
「一念せんじゃ、至心に回向したまえりじゃ」、この叩く手は何じゃと言う。
わからん。（笑）

「至心に回向したまえり、彼の国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得て不退転に住す、ただ五逆と誹謗正法を除く」という本願成就文を解説するのよ。因と果というのは、これは本願成就文の内容でしょう。だからその本願成就文、南無阿弥陀仏と念仏に救われてみれば、昔から促し続けていた本願、法蔵菩薩のはたらきがありがたい。「法蔵菩薩よ、ありがたい」と法蔵菩薩を思うてみると、仏様の智慧の光にまでなってくださっていた南無阿弥陀仏がありがたい。願と力、因と果がお互いに照らし合わせて、「即ち往生を得る」という事が起こる。

「あらゆる衆生その名号を聞きて信心歓喜せんこと乃至一念せん。至心に回向したまえり」と言って机を叩く。（笑）
ほんと何か分からないけれどもいつもやっていた。
同朋大学の学長をしていた尾畑君と仲が良かったから、「また、じいさん同じことを言って、もう聞いた」と言っていつも一番後ろで聞いていた。そして、二人で「おい、終わったらサウナに行こう」などと言っていた。

心をこめて同じことを話された先生
同じことを言う。それは「新しく本願を生きる者に変わったのだ」と言っているのです。
「信心歓喜せんこと乃至一念せん」（机をたたく）
その時に古い自我に死んで、本願こそ私の本当の願い、
私の本当の願いは「仏になりたい、浄土に行きたい」ということなのです。そういう言葉が難しかったら、
「分別を越えたい」、
「人を非難したり、自分が偉そうにしたりすることを越えたい」。
「青い色は青い光であり、赤い色は赤い光を出す、というふうに、みんなそれぞれが輝くようなものになりたい、比べる必要のないものになりたい」
「比べる必要がないということは、このままで十分なのだ」
「私は人と生まれて、初めて、このままで十分な自分に逢った、それがうれしいのだ」
そういうことを一生懸命こころを込めて話された。
しかし、また、その話が下手なのです。
「至心に回向したまえりじゃ、分かるか」。
私らは「そんなこと分かるか」と言いながら聞いていましたけれども・・・それを何十年もやられた。

いつも考えて発表すると怒られた。「それはちがう、そのもとはなんや、親鸞聖人はどこから言っているか、そのもとが分からないのに、考えるからなおさら分からなくなる。うそをつくな」と言って怒られた。恐ろしかったよ。そして同じことばかり何十年も聞かされた。そうしたらこんなになる。心配しなくても、だれでもなる。もう身にしみ込んでいく、そしてそれ以外に考えられなくなるまで勉強しなさい。だから五年間頑張ってください。短すぎる、いい。

そういう教えに遇っていれば必ず腹が決まる。

命の底から促している声

「死んでいくことができるようなものにまで私は育てられたのです。こんなうれしい教えに遇ったということが私の一番の喜びであった」と先生は亡くなる時にそう言っていた。癌だから「早く手術してください」というのです。だけど「もう十分や、もういい」と。まだステージ三か四くらいだから手術して治るのだから、「手術してください」と言うのですが、「もうよかろう、これでいい、わしはこのまま家に帰って家で死ぬ」と言って、サッサと帰った。そして亡くなる時に「ありがたかった、うれしかった、死んでいけるものにまで育てられた。わしはうれしかった。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、」と言って亡くなっていったのです。

話を聞いたら、そんな人がいるのかと思うかもしれませんが、それはすごかったよ。ガンがどんなに痛くても「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」。「痛かったら痛いと言ってください。痛み止めくらいいいでしょう」と言うと「ガンも頂いたものであります。生きることも死ぬことも南無阿弥陀仏の世界にいただいたものであります。」と言って。もう比べるということを超えて、全部引き受けて、死ぬことまでも引き受けて、そして念仏の声と同時に亡くなっていかれました。

私はそんなのを見たのです、だから、これは仏教しかない。いくらお金があってもそんなふうにはならない。いくら知恵(知識)や名誉があってもそんなふうにはならない。そんなことはどうでもいい。本当になりたいもの、それは私たちの命の底から促している声がある。「私が私でよかった」と言うものになりなさい。そう言っている。

だから、それが満足する世界を求めていく、それが仏道ですね。心配せんでもいい、十年も勉強したらそうなるから。五年経ったこの半分くらいは死ぬだろうが、それは仏さんになったということです。仏さんの世界から命を頂いて、また仏さんの世界に帰った、そのようなことです。必ずだれでも分かる。それには同じことを繰り返し繰り返し叩き込まれることです。

それから僕は怒られたことがよかった。褒められたことはいっぺんもなかった。よくあれだけ怒ってくれたなあと思っています。「馬鹿が！」いつもこれです。意味がわからない。馬鹿の意味がわからない。「馬鹿が！」ですから。

繰り返し同じことを勉強すること、本当のことは必ず身に入るから。長いことを本当のことを聞き続けていると身の方がそうなる。だから心配をしなくてもいい。こんなことを言っているとまた時間がたってしまう。

諸仏称揚の願

それで『『教行信証』』と言う書物は、他力の本願の仏教を明らかにするために書かれたのです。だから「行」と言っても、一般の大乗仏教の「行」ではない。さっき私が申し上げたように如来回向の行だ、そこに絶対他力のはたらきがある、だから、凡夫のままで救われていくのだということをここでおしゃっています。その通りですね。難しかろうが、難しくなかろうが絶対他力の仏教の行は「大行」である。その内容は「本願」と「名号」による。これをきちっとお書きくださっている。

その「大行」という行は第十七の諸仏称揚の願、聖典（東本願寺）でいうと十八ページにある。読んでみますよ、

「たとえ我仏を得んに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく恣嗟して、我が名を称せずんば、正覚をとらじ」

これが第十七願です。意味は、たとえ自分が阿弥陀如来になったとしても、十方世界の無量の諸仏たちが、全部私の名を称えなければ、私は阿弥陀にならないと誓っているわけです。本願と言うのは分かりにくいですね。

皆さんはどう思う、普通に言うと有名人にならないとしょうがない、世界中の人に知ってもらう。世界的な人がいっぱいいるでしょう。絵描きさんだったらピカソやら、音楽だったらベートーヴェンやモーツアルトのような天才的な人たちがおるし、ああいう有名人にならないといけない、というようなことしか考えられない。

これは何を言っているのかわかりますか。世界中の仏さん全部から褒められたい、と誓っているというのです。もう時間がないのではっきり言います。「私は世界中の諸仏の根源仏になりたい」と言っているのです。分かるね、どんな仏さんでも私の悟りの中に入る。凡夫でも私の悟りの中に入る。

だから凡夫から世界中の仏様たち全部に私の名を称えてほしい。普通、私たちだったら「有名になりたい」というふうにしか考えられないけれども、そうではなく、「私は凡夫から仏まで救う根源仏になりたい」と誓っているのです。だから阿弥陀如来だけが四十八の本願を建てて凡夫を救うという仏さんになりました。

根源仏

『大経』に「東方偈」という偈があります。

世界中の仏さんたちが「凡夫を救うという珍しい仏さんがおるらしいぞ」と浄土にまで会いに行く。そして遇った途端にびっくりする。何にびっくりしたかと言うと、「すごい仏さんがおる、私が成りたかった仏はこのような仏だ」と。その時初めて諸仏たちが分かる。「今まではできのいい人ばかりを救おうとしてきた。けれども私が本当になりたかったのはこのような仏様だった」、「自分の国も阿弥陀の浄土にしたい」と言って自分の国に帰って行くわけです。それは阿弥陀如来が根源仏だということです。だから、この第十七願というのは、「私は根源仏になりたいのだ」と誓っているのです。

今言っていること、皆さん眠たい顔をしているでしょう。（笑）

そんなことを言いだすとまた時間取られる。

すると田畑先生ににらまれるんや。（笑）

さっき言ったように私たちは何者になったらいいのか分からないでしょう。どうなったらいいのか、「金持ちになったらいい」という時もあろうし、「いいお母さんになろう」と思って頑張ってきたし、「いい嫁さんになろう」として頑張ってもきた。けど一体何者になったらいいのか、わからんわけです。僕は貧しかったから、やはり金持ちになりたかった。だから友達が国立大学に行って、みんな、いいとこに就職していくのがうらやましかった。そしてなんで、おれだけあんな学校に行って坊さんになって、門徒が一軒もない寺に帰らなくてはならないのかと思って、死んでしまおうと思って、まあたいがいどまぐれた（註1.）。分かりますね、若い時は。

【註】「どまぐれる」の意味は、「ぐれる」は広辞苑には⑴予期していたことといちがう。⑵わき道へそれる。堕落する。非行化する。とでています。先生の使い方（田川地域）は⑵の意味で、「ぐれる」を強調して「ど」「ま」を接頭語としてつけて「どまぐれる」と表現されているようです。

私はずっと金持ちになりたかったし、有名になりたかったし、それから、なんかみんなから褒められるものになりたかったのです。ところが松原祐善と言う人に会ったとき、死にかけて会った時に、私は分かった。「私はこの人のようになりたい」と思った。いつも自分だし、比べるものがない、「私が私でどこが悪いか」と。威張ることもしないが、卑下もしない。

私のような学生を「延塚さん、延塚さん」と言って、「さん」付けで呼んでくれた。「延塚さん死んだらあかん、頼むから生きてくれ」と涙流して拝んでくれ、「頼むから生きてくれ」「必ずわかるからそれまで生きてくれ」と言ってくれた。

単純な話ですが、そういう先生に遇って、「ああ、私はこの人のようになりたかったのだ、本当になりたかったのは」と、その時初めて思った。それは今から考えると、私の命の底から願っていることは、「何にも比べる必要のないものになりたい、仏になりたいのだ」と、初めて自分の本当になりたいものが分かったのです。それから僕ははじめて仏教を勉強しようと思って勉強をした。

言っていることは分かるでしょう。

それと同じことを言っているのです。諸仏たちはそれぞれみんな仏さんなのだから偉い人ばかりです。その偉い仏さんたちが阿弥陀に遇ったとたんに全員が「私が成りたい仏さんはこの人だ」と言ったのです。それは根源仏だということです。だから阿弥陀がわかれば全部わかる。

智慧の世界

僕は、絵とか書とか芸術と言うのは全然わからなかった。音楽と言ったらクラシックを聞いたら寝るね。うちの奥さんがピアノコンサートに行こうと言って京都会館に行ったけれども、ずっと寝ていた。「いびきかかないでよ」と言われた。何にもわからない。演歌は歌える。ほんとになんもわからなかったけど、南無阿弥陀仏と頭を下げたときに「ああそういうことか」と分かった。たくさんな天才的な画家がいる。ピカソにしろ、あれは何を表しているか、仏様の世界です。何にも比べないでいい世界です。だからピカソは下手なのです。あの人はものすごくうまいのです。天才的に、やはり天才なのです。ところが世界大戦を経たでしょう。その時に何かわかったのです。うまい奴は下手な奴をだめにする。だから自分は下手になった。見てごらん最後の絵なんて漫画みたいです。ミロもそうです。前も言ったようにピカソが（見学の人が）いっぱいだから、ミロのところに行ったのです。さすがにミロ（見ろ）というだけあって暇だった。ミロだってみんなこんなので漫画みたいなものばかりだ、あの人たちは天才なのです。けどあんな絵なのです。それは下手な奴が見ても安心する。そしてなんかいいなと思ってじっと見ている。

世界中から来ている。黒人も白人もあらゆる人が来て見ている。あれは本願が求めている世界を絵で表現している。阿弥陀の浄土を表していると言ってもいい、だって阿弥陀が根源仏だから、そうするとああいう芸術家とか音楽家とか天才的な人たちはあれは諸仏です。やはり仏なのです。仏の世界を表そうとしている。やはりそれはすごいよ。だけど南無阿弥陀仏がわかったらわかるようになると僕は思っている。本当はわからないけれども、何をしようとしているかくらいは分かるようになる。

なんでもそう、音楽でもそう。なんでもそうよ。だから凡夫でも阿弥陀に帰依したら、どんなことにでも智慧が開かれる、だから根

源仏なのです。その根源仏に私はなりたいと誓っているのが第十七願です。だから大行のもとになっている。凡夫でも救うと、凡夫でも救うということはどんな仏様も救うということです。それが阿弥陀如来の第十七願だから、この本願をもとにして南無阿弥陀仏の『大経』が説かれることになります。こういう意味で親鸞聖人は第十七願をここに持ってきます。

「論」と「釈」の引用

いいですか、言っていることは分かるでしょう。

それで、これから皆さんと一緒に『教行信証』を読んでいく時に、必ず今読んだように、行の巻だったら、まず最初に大行とは何か、そして本願が出て来る。第十七願。それが出てきました。そうしたら、その次に今度は経典の引文が始まります。『教行信証』は必ず全部そうなっています。ただ今までの読んできたところから言うと、教の巻だけは教論釈の引用ではなくて、釈尊と阿難との出会いが『大経』だけで終わっていた。それは教の巻だから。

ところが行の巻以降は、今言った親鸞聖人の「大行」を規定する文章があって、そのもとになっている願を出して、そしてその次に、今度は経典の引用、これが各巻の共通です。行の巻もそうなっている。

経典の引用が終わると、今度はその経典をこの世で具体的に生きた人、例えば龍樹菩薩、世親菩薩。さっきも申し上げたように経典に書かれている仏様の悟りは言葉を超えているから、身で感得した時に説明することができない。だから皆どうなったかというと、皆詩人になった。偈を歌った。「世尊我一心　帰命尽十方無碍光如来」と偈を歌った。

親鸞聖人もだから偈を歌った。「帰命無量寿如来、南無不可思議光」これが南無阿弥陀仏の果のはたらきです。そうすると今度はいきなり「法蔵菩薩因位の時」というふうに法蔵菩薩の話になります。これは常識では何のことかわかりません。南無阿弥陀仏のはたらきを無量寿・無量光のはたらきで褒めた。そして果の仏様を讃めたら、今度は因の法蔵菩薩のはたらきになった。そこの因と果になっているでしょう。

「私はこれによって救われたのだ」と言っているのです。そんなふうに偈を中心に書かれたものを「論」と言います。仏教は「論」を書くのは菩薩と言われるインドの人達です。ですから七祖で言えば、龍樹、天親、こういう人たちの「論」を引用します。

これは今言ったように経典だけでは分かりにくいから、経典の悟りをこの身で生きた人、具体的に生きた実証、それを「論」として引用します。それからその次に、もう少し私たちの近くに近づけてくれて注釈をしてくれた人たち、曇鸞、道綽、善導、源信、源空。こういう人たちは「論」ではないけれど、経典の注釈、例えば善導大師だったら『観経疏』、観経の注釈、道綽の『安楽集』もそうです。曇鸞大師は論の注釈、ですから「論」が引用されると、その次に今度は注釈という意味で「釈」が引用されます。

行の巻で言うと龍樹、天親　曇鸞、道綽　善導、源信、源空と七祖，この引文が続きます。ですから本当は行の巻を読む時には、「経典」と「論」と注釈「釈」、七祖をずっと勉強すると「ああなるほど、さっき言っていた大行を、この世でこの身で実証した人たちの言葉が並べられているから、なるほど大行というのは、凡夫のままで救われるのだ」ということがわかるようになっている。分かる人にはな。

御自釈ー実感を述べる

学者と言うのはだいたい分かることを分からんようにするからね。あれは解釈ばかりしとるんだ。言葉の解釈なんかして何が分かるか。もとはなんや、もとは。もとが分からないで言葉の解釈ばかりしてると分かることが分からんようになる。（机をたたく）松原さんが言ったとおり。（笑）僕が言っていうとるんじゃない、松原さんがそう言うたんや。だから解釈ばかりが学問だと思ったら大間違いや。

親鸞聖人の『教行信証』は、これは解釈をしていない。全部自分の実感を正直に経典に返して述べている。あるいは七祖に返して述べている。さっき読んだところは御自釈といいます。自分で筆をとって書かれたところです、皆さんの聖典で言うと下に横ラインがあるでしょう。

例えば、今日読んだところ、下に横の線があって、その下に漢文が出ている。これが親鸞聖人が自分で筆をとって書かれたところ、という意味で、御自釈と言います。因文のところは、経典の引文ですが、下にラインがないでしょう。ラインのないところは全部引文です。そしてその引文が終わると、それをまとめて親鸞の御自釈がまた述べられていきます。百六十一ページ(東聖典)、

「しかれば名を称するに、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたまう。称名はすなわちこれ最勝真妙の正業なり。正業はすなわちこれ念仏なり。念仏はすなわちこれ南無阿弥陀仏なり。南無阿弥陀仏はすなわちこれ正念なりと、知るべしと。」

これが親鸞聖人の御自釈と言われる、筆をとって書いたところです。

皆さんはあんまり勉強していないから、わからんと思うけれど、例えば「しかれば名を称するに、能く衆生一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたもう」これはさっき言った『論註』の讃嘆門釈にある言葉をそのまま引用しています。そして、その後の言葉も「経典」の言葉、「論」、「注釈」の言葉を駆使して書かれていて、自分で作った言葉ではありません。

そんなふうに親鸞聖人は自分の御自釈であっても、ちゃんと経典に返して、経典の言葉とか論・注釈の言葉によって書き直している。あれだけ天才なのだから、分かったら分かったことを自分の実感として書けばいいと思うかもしれませんが、それが一番危ない。自分がわかっていると思っているだけのことかも知れない。だから必ず経典（大経）、論（論註）、先輩たちの言った言葉によりながら自分の感動を述べていきます。それで経、論、釈の引用のところどころに御自釈がはめられていく、こういうことになっていきます。

けれども親鸞聖人の本当のお心は『教行信証』は経典の引用だけでいいのです。さっき言った「根源仏になりたい」という阿弥陀の最も深い願い、それによって南無阿弥陀仏が起こったのだから、第十七願の意味を経典によって述べればそれでいいのです。ところが私たちからすると何のことかわからないから、今度は経典を実際に、凡夫のままで救われた人たちの言葉を並べたわけです。世親は凡夫ではない菩薩ですけれども、まるで凡夫が救われたように「功徳大宝海」と、この身のままで仏様の悟りの中に生まれたのだという言葉を残してくださっている。「これが大行のはたらきに帰依した世親の言葉なのですよ」と、私たちにわかるように、実証的な言葉を並べていく。そして御自釈をところどころに挟んでいく。こういう形に

なっています。本当は経典の引用だけでいいのですが、それだけでは分からないから、論・釈の引用で長くなっているのです。

ところが僕たちは、なんというか頭がいいから、余計に書いてくれるとなおさら分からなくなるのです。少しずつ読んでいたら、どれだけ時間があっても足りないから。

平野修先生

今日のお話を聞いていて、親鸞聖人の一番大事なところは凡夫のままで救われるということでした。そうすると大行の一番大事なはたらきは「どんなものでもでも救う」ということでした。そうすると、あの、人間と言うのは根性が悪いからね、僕らのように勉強をして、そして親鸞聖人の教えを伝えていると本人は思っているのです。

だけど結構金になるのです。（笑）だから頑張ってまた北海道とかに行くのや。（笑）反対から言うと、嘘つけない、身はね。そしてやはりこれは正直に申し上げるけれども、やる以上は「本当のことを言いたい」とか、「有名にならなくてはいけない」とか、そういう根性が抜けません。

平野修という先生が九州におられました。けれども、ガンで早く亡くなってしまったのです。最後に会いに行ったのですが、亡くなる一週間ほど前でした。まだその時はお元気でした。そしてベットに正座をして「ようこそ、最後に会いに来てくださいました。」と言って頭を下げられました。そして中川浩三郎という先生と私と二人、他にうちの奥さんと三人だった。その時平野さんが最後に言ったのは「私は、小さい寺に子供の時に養子に出された。（六歳の時に平野と言う寺に養子に出されたのです。）そうしたらご門徒さんがみんな『お前、偉いものにならんと、この寺の門徒は何もないのだから食べていけないぞ』『偉いものになりや』と言われ続け、私はそれが抜けなかった。『偉いものになろう』と思って、今日まで頑張ってきました。死ぬまでそれが抜けませんでした。」と言って、はじめて大声を出して泣いた。ベットに泣き伏した。

中川先生は平野先生と同級生でした。僕は五つ下です。だから中川先生に帰る時に「平野先生が泣いたのは初めて見たけど、中川先生、今まで泣いたこと見たことがありますか」と聞いたら「ありません、私も初めて見ました。」と。その泣いた理由が仏教を勉強しても結局「偉いものになろう」と思って頑張ってきた根性が抜けなかった、と言って泣き伏したのです。分かりますね。

阿弥陀如来はそういうものまで救わないといけない。それが大行でしたね。ですから仏教に志して仏教がわかっても、わかった仏教を今度は自分の手柄に植え直す。これは少し勉強した人は分かるでしょうが、第二十願で誓われている「植諸徳本の願」という。諸々の徳本を植える。

最後まで残る人間の根性

自分が救われた仏教まで自分の手柄にしたい、というのが人間の最後まで残る根性です。

昔、おったでしょう、仏教がわかったじいちゃんやばあちゃんたちが。「ああ、この嫁は仏教を聞かんからつまらん」と言って怒るじいちゃんやばあちゃんがいたでしょう。ああいう人たちは仏教が分かっているのです。分かっているけど、分かった仏教を盾にして今度は人を非難する。そうすると、結局仏教がだめになって、なんがなんか分わからなくなる。「あのばあさんはうるさいからいややわ」

みたいなことになっていく。この間まで田川にもいたじいさんが自分で悩んでいた。「俺は本当のことを言っているのに、ほんとのことを言えば言うほど人は離れていく」と。そうなっていく。

自分の自我が、結局、仏教に植え直して、仏教まで自分の手柄にして自慢する。そして徳本というのは、これは「仏になる」ということです。仏になることまで、自分で植え直して決めようとする。仏になるかならんかは絶対他力の仏様のほうのはたらきです。それなのに、いつの間にか、自分で「こんなのではだめなのではないだろうか、もうちょっと頑張らなあかんのとちゃうか」と言って、花を飾って、香を焚いて、そして勤行をして「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と一心不乱に念仏するようになる。

そう書いてある。それは僕らや。毎日香を焚いて・・・それは結局、分かった仏教を自分の救われることまで、それを自分で決めようとする。それは結局仏様を信じていないことになる。しかし、信じていない人までも救わなくてはならない。

今は、仏教に触れた人のことを言っていますが、仏教に触れない人も一緒です。最後まで自分の根性は抜けません。そうすると最終的には、仏教が分かったとか分からんとか、触れたとか触れなかったとかいうのはどうでもいいのです。分かろうが分かるまいが、「人間の根性の最後まで抜けない、それを丸ごと救う」というのが阿弥陀のはたらきです。

二十願の問題

だから仏様、阿弥陀のはたらきが一番苦労するのがこの二十願の問題です。仏様の方が苦労する。この経典の引用をするときに、本当は第十七願の根源仏になりたいということだけを引用すればいいのですが、この経典の引用のところに、わけが分からんことに、二十願の願文がでてきます。これが今までの解説とか解釈では何のことか分からないから、みないい加減なことを言っています。

けど、いいですか、分かろうが分かるまいが人間は最後まで、死ぬまで、変わりません。「その全部を救う」というのが、この二十願に誓われている問題です。

「救いまで勝手に決めるな」と仏さんは言っているのです。

「救うのはこっち（仏）の問題であって、お前たちの問題ではない。手を放せ」と、訓覇信雄さんがよく言っていました。

「仏教は獲得せ、つかめ、一回つかんだら、つかんだ手を放せ」と言っていました。

言っていることは分かりますね。

そのようにこの十七願の願文の中に二十願の願文まで一緒に出て来るから、何のことかよく分からない。だから、僕はここの経典の解説は今までほとんどできていないと思います。

しかし今、言ったようにここが大事です。仏教が分かろうが、分かるまいが人間の根性は死ぬまで抜けません。全部自分中心主義、それを救うのが仏様のはたらき。だから名号の一番大事なはたらきは、この二十願の機まで救うのだということが、この行の巻のところにもうすでに説かれています。そのために二十願の願文まででてきています。

ここから先よく分からない二十願の問題が説かれているのは、今言ったように、仏様は分かったとか分からないとかはどうでもいいのです。本当の達人は最後にそうなるのです。僕の先生もそう言っていた。若い時は「お前分かっていない」と言っていたが、「分かっ

ても、分かっていなくてもどっちとも救われるのよ。いいのよ、分かっても分からんでも」そういうふうに言っていました。

法執をぬける

親鸞聖人は、若い時はきついのです、法然門下で「信心同一の問答」とか「信行両座の問答」とか、「お前ら、信心が分かっていないだろう」と吹きかけて言うから、みんなから嫌われたのです。だけど、お年がいかれた親鸞聖人は、えらかったのだけど、その偉いのも抜けて普通のじいさんになったのだと思う。聞いたら「それはこう言うことではないでしょうか」と言ったかもしれない。けれど、まあ何と言うか、おおらかと言うか、自分が分かった仏教を自分の手柄にしない。それが「法執をぬける」ということです。

自我を越えても自我が「法執」に変わる。形を変えただけになる。だからこの「法執をどうしてぬけるか」というのが、今の世界の仏教の問題です。仏教だけではない、世界の宗教の問題です。

一番わかりやすいのは自爆テロです。自分が分かった宗教のために、自爆し、人を殺したら聖人になるのです。あれは仏教から見ると完全に迷いです。殺人です。絶対にやってはいけない。普通のことですが、あれを本気でやっているでしょう。あれが法執なのです。だから大乗仏教は、世界の宗教の中でただ一つ、自分の分かった仏教からも解放されていく。「法執を越える」ということは、浄土教でいうとこの二十願の問題として提起されているわけです。難しいことを言っているようですが、言っていることはわかるでしょう。卑近な言葉で言うと「仏教が分かっても分からなくても、どっちとも人間の根性は死ぬまでぬけない。」その全部を救うのが大行なのです。「救いまで自分で勝手に決めるな」、手を放してしまうこと。

そこまで経典の引用が説かれています。本当は十七願の引用だけだったら分かりやすい。ところが二十願の引用まであるから何のことか分からない。それは今言ったような意味です。

ちょっと時間が過ぎちゃった。

今日は一応ここまでで終わりましょう。

〈質疑〉

（田畑）四時半まで質疑応答ということで先生にまたご苦労をおかけします。質問のある方は挙手を、門徒会館の方は、こちらに来ていただいて。

非常に基本的なことですが、引用文の後に「乃至」とか「已上」とか「抄出」と言うのがありますね。私あれは全く分からないのですが、あれは漢文のルールかなんかあるのですか。

（先生）「乃至」と言っているのは原文を読むと、その乃至されているところに文章があるわけです。ところが親鸞聖人は天才ですから、これを入れると、分かることが分からなくなるから、そこだけ省きましょうと言うふうに書いているところが「乃至」。

だから乃至のところは、そこまでここでやるとみな寝るから、博士課程くらいになると原文を持ってくるわけです。そして大経の原文はこうなっていると、ところが親鸞聖人が引用しているのは、「こ

こと、ここと、ここを」つないでいるとか、あるいは乃至してここを削っているとか、ということが分かるわけです。そうすると今度は反対に、なぜここを乃至したのか考えるわけです。そうするとなるほどあの人は天才だなと、これを入れるとわかることがわからなくなるとか、これを入れると大乗仏教と一般の仏教と区別がつかなくなると、そういう必要でないところは乃至して、今言った絶対他力の仏教を明らかにしている文章だけを引用して繋いでいると考えてください。そうすると乃至のところは、親鸞聖人からするといらないところというか、誤解されるところと言うか。分かるところが分からなくなるところを乃至しています。

だから反対に学問というものは、乃至したとこだけを読むという。そうすると反対に引用しているところが浮き上がって出て来る。そうするとこの浮き上がっているところはどういうところかと言うと、今、言った絶対他力の仏教を明らかにしている文章だけを抜きだしていると、一番分かりやすく言うとそういうところです。

（田畑）「巳上」というのは、それ以上ということですか

（先生）そうです。

（田畑）「抄出」というのは、あまり関係ないですね。

（先生）関係ないということはないのです。あるのですが、「乃至」と言うのは、今言ったこと。「抄出」と言うのはそこから選び取った。ところが例えば、偈、行の巻でいうと東方偈がある。引かれてきます。ところが東方偈も、今言ったように「乃至」している。要るところだけをひっ付けてこれだけにした、その時に「抄出」と書いています。それは本当は全部引用したいのですが、偈だから、やはりわかるところと分からないところがあるから、わからなくなるところがあるから、そこだけを「乃至」して、これ全体が東方偈の歌の意味ですよと、これで東方偈ということがよく分かるでしょうというところに「抄出」と書いてあります。

それから「引文」も「巳上」と書いてありところは、それなりに意味があります。原文を見ると本当は続いているのです。本当はこっちよりこっち側に重きがある。そう言う引文の場合があるのです。ところがそれを途中で切ってしまって「巳上」と書いてあるのです。ここまでですと、それが親鸞聖人の『教行信証』のやり方なのです。ですから実に引文で構成されていますけれども、親鸞聖人のさっき言った実感に即した文章になるところだけを取って、そして今言った「乃至」「巳上」「抄出」ということを駆使しながら絶対他力の仏教を明らかにしている。ということになります。だから反対に変な奴は抄出のところに引かれていないところだけを合わせてみるとか、そんなことをする人もおります。そう言うやつは暇な奴です。

（田畑）ありがとうございました。

（質問一）私が質問するのは常にひとつで、「どうしたら私が信心を頂けるか」という一点です。多分、これからもこの質問をくどくどとやると思います。なんぼ聞いてもいつまでもわからない。そのうち先に分かる人が出て来ると思うのですが、仏道ですからみんなと一緒に聞いていって、みんなで分かっていきたいという願いをもっております。

質問です。ここは行の巻ですから、「大行」というものがあって、先生に遇って本願に遇わしていただくのは、平たく言うと、念仏している人は先生に遇いやすいし、本願に遇いやすいということでしょうか。

（先生）聞法には苦労がいります。大事なのは自分の実人生です。生活の重さ、生活の中で解けないことがいっぱいありますね。「なんでこんなことが起こるのだろう」と言うようなことばかりが起こるでしょう。その時に経典の言葉を思い出すこと、そして「どうして、こんなに苦しむのだろう」と言うふうに考える事。聞思、これが仏教に遇うために必要な方法論です。

若い頃、僕が「おれはそうしているのですがなかなか分からない。それは分からせない先生が悪いのだ、俺を救え、俺を救えん限りおれは先生と認めん」と言った。そうしたら、そのじいさんが怒って、僕に酒をぶっかけて、コップを投げつけて、ここにカチンと当たった。その時、その先生が「お前みたいな、小賢しい奴に仏教がわかってたまるか」と言われた。腹が立って、「くそったれ、こんな奴は死んでしまえ」と思ったら、死んでしまいました。

けども、仏教に遇ってよく分かりました。

なんでもかんでも小賢しく、頭の中でひねくり返して、そして先生まで「お前なんか認めない」と生意気な・・・。

「そんな小賢しい奴が仏教が分かってたまるか、そのお前の立っている立脚地が、それが仏教を邪魔しているのだ」と言ってくださっているのだけれども、その時には分からなかった。自分が立っている土台は人間にはわかりません。

日本人が日本人が分からないように、韓国は叩くでしょう、文在寅というわけの分からんことばかりごねまくって。「あれは韓国人の体質です」僕の友達はそう言っていました。理屈で攻めていったらああなるのです。あれはだめです。最初から掛け違えている。と言っていたのは僕の友達、大成建設の役員をしていた人です。

なんでかと言うとその人は、仁川の空港の近くに地下のガスタンクを作ったのです。あそこは戦時下ですから、ガスタンクを上に出すと攻撃されるから地下に埋めている。ところが地下のガスタンクを作るのに五年くらいかかったのです。それを全部韓国人を雇ってやったわけです。まあ、それはどれだけ苦労をしたか、わけが分からない。

昨日までに、明日の工事はこうするぞと段取りをきめているのに、次の日になったら全然違うことをやっている。「昨日一日会議をしたのは、なんだったのか」と問い詰めていくと、もうすねて「そんなだったら、もうしない」と言って、「今日の気分はこうしたかった」と言うような話。

だから理屈をきちっと言って理屈が通ると思ったら大間違いなのだと、日本人は割と理屈をきちっと並べて通そうとするのです。ところがそうでなくて感情の方を生きようとする民族はいくらでもあると。だから理屈で通していって、あれをやったら韓国人とは収拾ができないよと。彼が言った通りになりました。

わかりやすく言いますと、日本人は理屈を通す、理屈が通ったら「なるほどな」という体質。その体質は韓国人には分からない。韓国の人は理屈よりも感情というところに立って生きている。ところが韓国の人もそれが分からないから、お互いに本気で喧嘩をしている。つまり戦争になるかもしれない。ということになっていきます。

そんなふうに自分が立っている土台は、これはわからない。その土台が破れる時があります。それが仏教に触れた時です。

彼は一生懸命にわかろうとして頑張っています。あれは本願の促しでしょうね。けれど、それがどうしても理屈で分からないから、「わからない」と言っている。

親鸞聖人は理屈で分かるように実感を言葉に戻しているわけです。だから分かるようには書いているのです。

例えば「しかれば名を称すれば無明が破られる、志願がみたされる、その通りかもしれないが、俺はそれは分からん」というようになるわけです。

人間に、生涯貫く心なんてひとつもないよ。ところが「それでいいのか」と言って促してくるいのちからの促しは、生まれて死ぬまで続きます。これは生涯消えない。そして生涯一貫している。それが何なのかという正体が分からないから、私たちは不安で苦しみます。そして仏教を求めます。

ある時、自分の実人生の重さに悩んで、そして、これまで勉強してきた親鸞聖人の言葉が思い出される。例えば「いずれの行の及び難きみなれば、とても地獄は一定すみかぞかし」、その時に、「ああ、そうか」とわかる。

あるいは私をたいへんかわいがってくださった高史明という先生がおりますけれども、高史明さんが「悪人こそが救われる」、「あれで、私は感動したのです」と言われた。そのように、勉強してきたことが思い出されてくる。

読んで理解するとか、わかるとか、全部外を向いている目が、ある時、こっち側に向いて、「ああ、本願に今まで生きてきたのだ」というふうに、こっち側に向いて、自分が立っていた土台が崩されることがある。それが南無阿弥陀仏という意味です。

それまではどうしたらいいか、いいですか、全部絶対他力ですから仏さん側の責任です。ところが信心だけは皆さん一人一人の責任にあります。

『歎異抄』にあるでしょう。「ただ信心を要とすると知るべし」と。

「本願はどんな人をも救うと誓っているではないか、だから、分かろうが分かるまいがすくってよ」、と言われても、「それはだめです」と。「ただ信心を要とすると知るべし」。一人一人の責任で、信心だけはあなたの責任で、勝ち取りなさいと。

その信心の内容は、今言ったように経典の言葉によって自分の人生をよく考えなさい。やがて必ず、時が熟した時に、先生が言った言葉一つがズバッと自分の全体をつらぬいて、自分が立っていた土台が、どんなに愚かであったかということがわかる。その時に初めて、五体投地、懺悔が起こる。そして、そのままで仏様の世界に遇ったという讃嘆が起こる。讃嘆と懺悔、それが信心の内容になります。

そこまで教えを聞き、自分の人生に悩むこと。だから悩むことは、今の世の中ではいいことではないと思って、子供を育てるのも、あんまり苦労しないように育てている。それはだめになります。苦労をさせなさい。そして悩むことは悪いことではない、悩むことが仏教に最も近い近道になります。その時に、自分の考えだけでは絶対に破れないから、教えの言葉をよく聞く、ということが大事になります。それを続けるしかないと思います。

（質問一）ありがとうございました。

（質問二）もう時間が少ないけど、いいですか。

（先生）どうぞ、どうぞ。

（質問二）すいません。仏様は五劫もの長い間、修行と言うか、考えられた。それは、私を救うにはそれくらいの長い時間が要ったのだということ、私はそこら辺を時々お聞きします。そんなに長いということは、私はそんなに業が深いから・・・確かに息子のことで悩んだり、鬱になったりしました、ほんとに「仏様何とかしてよ」というようなことを経験してきたのですが、五年とか五十年なら話は分かるけど、仏様は五劫と言う・・・、そこまで私って業が深いのかなと思わされます。ただ、先生が最後の方で「平野修先生は、いよいよ亡くなれるときに『ご法をたくさんいただいてわかっている、そこら辺がやっぱりひっかかりでした』と言われた」とお聞きしますと、些細なちょっとしたことも、なんというか、私の深い罪と言いますか、業といいますか、そんなものなのでしょうか。「五劫もって」思うのですけど・・・。

（先生）そうですね。だから親鸞聖人は、「五劫」をそれほど実感として頂いたということは、反対に言えば「絶対救われない私がここにおる」と言っているわけです。救いを放棄したのです。皆さん救われるために仏教を聞いているでしょう。「救いなんかあるか」とわかるまで聞きなさい。救いを放棄したのです。だから「地獄は一定の住み処」と言っているでしょう。そして「救われようと思って一生懸命やってきたその根性が間違っていた」と言った。「五劫、仏さんが苦労した」ということは、「永遠に救われない、死んでも救われない私がここにおる」ということを表明しているのです。

（質問者二）ありがとうございました。そのお言葉は宿題にいたします。ありがとうございました。

（先生）えらいばあちゃんや、いやいや、なかなかえらいばあちゃんやね。

（田畑先生）時間となりました、終わらせていただきます。ありがとうございました。

（先生）いえいえ、ありがとうございました。難しい話を、どうもすいません。私の責任ではありません、親鸞聖人がむずかしいのですから。

文責は編集者の田畑正久にあります。